

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより

春号
20年5月
No.56

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局

〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル

発行人／奥村 豊

TEL 075-366-6609 FAX 075-366-6679

E-mail: bukatsu@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp/bukatsu/>

今、なすべきことは何か

早川 努 (名古屋教区司祭)

新型コロナウイルス感染拡大のために、世界は未曾有の危機的状況に陥りました。感染者の方々の早期の回復と犠牲になった方々の永遠の安息をお祈りするとともに、新型コロナ対策に従事する医療関係の方々には心からの敬意を表したいと思います。

さて、先日、ベルリンフィルのコンサートマスター、榎本大進さんがテレビのインタビューに答えて、新型コロナの問題が起きるまでは音楽がなければ生きていけないと思っていたが、新型コロナ対策の自粛呼びかけで音楽ができなくなって、音楽よりもっと大切なものがあることに気づかされた、と話していました。

わたしたちカトリック信者も、3月以降、復活祭の時期だったにもかかわらず、感染防止に協力して多くの教会でミサを控えてきました。榎本さんの言葉を借りるなら、ミサよりも大切なことがあった、ミサが絶対のものではないことが分かった、ということでしょうか。

しかし、榎本さんの話にはまだ続きがありました。

たしかに生きることが何よりも大切ではあるが、ただ生きているという今の状態のままでは生き続けられない。慰めも勇気も与えてくれる音楽は、やはり人間にとって不可欠なものだということを再認識したということです。

ぜひ、わたしたちも彼にならって、やはり信仰は人間にとって欠かせない、福音は素晴らしい、カトリック信者にとってミサは力の源泉で、みことばを生きる生き方こそ最高だと言いたいものです。わたしたちが言うばかりでなく、世界の多くの人たちがそのことに気づいてほしいと思います。

そこで、そのために何ができるかです。

新型コロナが収まった後の世界がどうなるかについて、悲観的な見方と楽観的な見方の二通りの見方があるようです。

悲観的な見方とは次のような見方です。

経済は過去に経験したことがないほど落ち込む。生産も消費も減退し、失業者があふれる。米国と中国は関係を悪くし、新型コロナ対策にも協力できなかった。米国はもはやリーダーシップを発揮できず、各国が自国中心主義に走って世界は分裂する。各国政府は感染拡大防止策をとった際の強権主義を抜け出せず、独裁的になり、監視社会が強化されるだろうと。

しかし、その一方で、こうした悲観的な方向に転がるのを防ぐような、さまざまな言説や事態も生まれています。社会的弱者を支え、人と人、国と国との連帯と協力を呼びかける声が満ちあふれています。もはやさまざまな情報を隠したりすることはできず、ITを賢く利用する仕組みが整えられつつあります。このように、むしろいい方向に進むという見方もあります。

このどちらに進むかは、今後のわたしたちの対応次第ということになるのでしょうか。そのためには、今、静かに深く考えること、祈ることが大切です。

経済活動が停止したと言われながらも、毎日食べる農産物、水産物などは毎日スーパーに出回っていました。生活に困る人がいないように、食糧資源の配分を工夫することが重要です。そうすれば、これまでと同じような経済生産性が本当に必要なのかは大いに疑問です。観光業や飲食業は打撃を受けましたが、わたしたちはこれまでのように、飲んだり食べたり遊んだりということが、本当に必要なのでしょうか。戦後の高度経済成長期以来、いや今日ではむしろその頃よりもさらに激しく、人生を労働だけに費やすという生き方をわたしたちは選んできました。現代の日本人は物心がついた時からずっとスケジュールに追われる毎日を生きています。幼稚園児も、小中学生も、朝から夜まで、学校と部活と塾と習い事に追い回され、親は子どもの奴隷のように面倒を見ています。おとなも子どももスケジュールに追われ、自然とも他人とも、そして自分とも、ていねいに関わることができず、命をすり減らしています。新型コロナ対策で学校が休みになり、子どもが自宅にいるとさまざまな支障を来しました。家庭は子どもが本来いるべきところであるのに、安心して家庭にいられないことの方がおかしいではありませんか。この時期ばかりは、以前から不登校で家庭学習などをしてきた子どもの方が安定した様子に見えたのは皮肉でした。

ポスト新型コロナの時代にあっては、あわてて元のような経済と科学技術の支配する社会に戻すのではなく、ゆっくりと自然をあじわいながら精神的に豊かな社会を目指すように、価値観と生活スタイルの転換が起こることを望みます。

福島原発事故後に日本カトリック司教団は「今すぐ原発の廃止を」というメッセージで「清貧」の旗を掲げ、「福音的精神に基づく単純質素な生活様式を選び直すべきで

す」と述べて、経済至上主義からの脱却を訴えました。残念ながらわたしたちは原発事故という未曾有の人的災害を起こしながらも、十分にそこから学ぶには至っていません。けれども、このたびは、ぜひ、しっかり学びたいものです。

人間は大きな試練を乗り越えたときに、ひと回りもふた回りも成長するものです。社会も同じように成長しなければなりません。このたびの異常事態は四旬節の間に始まりました。四旬節といえば「祈り・節制・愛のわざ」がモットーですが、今や世界にこの精神を浸透させるべきときなのではないでしょうか。

部落差別人権問題にかかわり、人間の本質を見つめてきたわたしたちだからこそ、このようなときに、世に向かって価値観と生活スタイルの転換を提言し推進することができます。そのために、今は静かに、家の奥の壁に向かって創造と解放の神に祈り、福音書を読んでイエスのことばとわざ、その生き様にたっぷりと浸り、福音を伝える意欲をしっかりとため込んでおきたいと思います。

シリーズ：聖書（いのちのことば）を生きる

黄金律は本当か

奥村 豊（京都教区司祭）

マタイ、マルコ、ヨハネに載せられているエピソードには、ベタニアでイエスに香油を注ぐ女が登場する。そこには高価な香油を無駄遣いするととらえて、弟子がそれを制止する場面がある。ヨハネの福音では、イスカリオテのユダが「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人に施さなかったのか」（ヨハネ12：5）ととがめる。とがめたのがイスカリオテのユダなので、これは偽善的な言葉だと誰しも直感しそうなどころであるが、わたしたちはえてしてこのような言葉をまき散らすことがあるのではなからうか。金持ちの男に対してはイエスが「行って持っているものを売り払い、貧しい人々に施しなさい」（マルコ10：21）と言われたくらいなので、ヨハネのこの場面でイエスがユダの言葉を制しているのが不思議に思えた方もおられるのではなからうか。もちろんここでは、イエスの埋葬の準備として香油が注がれたと読めるので、釈義的には落ち着くのであるが、それとは別について私たちが陥りがちな偽善的言動を吟味してみたい。

心理学者でラジオの電話相談をしていた加藤泰三氏の言葉にこういったものがある。

「人を助けたい人は、自分が助けてもらいたい人である。」

この言葉は人間が陥りがちなおせっかいの罠を警戒しているのだ。自分がお世話してほしいのでやたらとありがた迷惑な世話をしてまわることへの警戒である。その親切心があからさまで、この親切を断ると関係が悪くなりはしまいかとついついお世話されてしまう。しかしその後こちらがそっけない態度をとると薄情者扱いされることになる。逆に実に親切ないい人だと思いい好意を受け続けると、互いに依存しあう泥沼にはまっていくことがある。親切があだになり、互いに不自由な人間関係ができあがってしまう。これは人間心理の繊細さがなせる業でもあるのだが、互いの自由意思を尊重できなくなるのは人間的成長にとって大きな足かせになるのだろう。

共観福音書には最も大切な掟をテーマとしたエピソードが載せられている（マタイ 22：34－40、マルコ 12：28－34、ルカ 10：25－28）。そこでは対人律法として「自分を愛するように隣人を愛する」ことが要求されている。これは、「自分がしてもらいたいように人にもしなさい」というキリスト教の黄金律と信じられていることに通じているだろう。とすると、キリスト教は自由意志を尊重できず、ついついおせっかいしてしまい、のっぴきならない依存関係をつくりだしてしまう宗教ではないのかという結論にいたってしまうのではないだろうか。

いや、その結論は早計かもしれない。まず要らぬおせっかい、例えば「この青年は適齢期でそろそろ結婚相手を求めているから世話してやろう」といった心理は、世間の常識に当てはめてみて、当然その青年が結婚したがついておもんばかるところに生じたりする。これは決して自分がそうして欲しいことを相手にしていることにはならない。あくまで世間の常識を押し付けようとしているにすぎない。つまりお節介しようとする人自身が、自分の望みを十分に吟味できないまま、常識を相手に押し付けているにすぎないのである。

次に、仮にお世話好きの人が十分自分の望みを知ったとしよう。そしてそれを相手にもしてやろうとしたとき、そこに大きな問題が生じる。自分の望みと相手の望みが異なっていたらどうなるか。つまりそこには、お世話される人が自分の望みに反して、お世話してくれる人の望みを実現しなければならないという強制が生じるのである。性的マイノリティに属する人にこれを強制できるだろうか。もういい加減に結婚しなさいと言えるだろうか。また感染症の罹患者に、あなたは外にいと石を投げられるから家にもっていなさい、収容施設に入ったほうが身のためだと言えるだろうか。

新型コロナウイルス渦の中、起こっていることで実際にわたしが人から勧められたことがある。他県ナンバーの車を停めているとキズをつけられるから「この車は他県

の車ではありません」という札を役場でもらってきたほうがいいよ。ずいぶんお世話好きだと思う。そういった犯罪行為をする人を前提に何も咎められるいわれのない人間が役場に出向かなければならないとしたら、こんなばかな話はないだろう。こんなこみいったケースでなくとも、店は開けないほうがいいよ、マスクはしたほうがいいよ、アルコール消毒液はおいたほうがいいよ。わたしの住む三重県は営業時間短縮要請しか出ていないのに、閉まっている店が実に多い（お前はどこをほっつき歩いているのだと言われそう）。過剰な自粛である。そしてそこには対立が醸し出されていく。ハンセン病の歴史の中で無癩県運動や隔離政策が展開された日本社会の面目躍如である。

さて、黄金律「自分がしてもらいたいように人にもしなさい」をどうとらえるか。わたしはこう思う。まず、わたしは自分の望んでいることさえもはっきりととらえることはできない。そのことを他者が分ることも当然できない。次にだからこそ対話のうちに互いが望んでいることを確かめていく作業を継続するしかないのだと。すると意外なことに人間が根本的に望んでいることは実に単純なことに気付くのではないか。それを先回りして面倒なので君の望みを分かったふりをして要らぬおせっかいをしてはならないのだと。黄金律をだいなしにしてしまうようで心苦しいのだが、今はそんな心境に浸らざるを得ない。

第 13 回対話集会

冬枯れの光景から春の連帯へと向かう部落解放運動 II

日 時：2020年9月21日（月・祭）11：30～17：00（昼食各自）

場 所：大阪梅田教会サクラファミリア

発題者：谷元昭信さん（元部落解放同盟中央書記次長

大阪市立大学・関西学院大学非常勤講師

部落解放論研究会共同世話人）

申し込み、詳細は事務局にお問い合わせください。

Tel.075-366-6609・fax075-366-6679

E-mail : bukatu@kyoto.catholic.jp

対話集会後、交流会を予定しております（参加費 3000 円程度）



#61 Stay home!??



↑お父さんはもともと在宅ワーカー。



#62 No more heroes!!



#63 Don't forget!!



2020 April 2020

濟州島 4. 3 事件レポート

福音の小さい兄弟会・おおたまさる

濟州島の姜禹一司教さんを訪ねて2020年2月16～18日の3日間、濟州島での4. 3事件をめぐる学習旅行をしてきました。姜司教さんにフクシマの白河教会で原発についてお話いただいたときに、聴かせていただいた姜司教さんの生きざま・活動を現場の濟州島で見せて戴きたいと願っての訪問でした。まずは、最近の濟州島・米海軍基地建設反対の運動があり、つぎにベトナムでの韓国軍の村民虐殺の行為への反省があり、一番奥に1947年4月3日から始まった「4. 3事件」があります。この全てにおいて、静かに語る姜司教さんの姿・声からは想像もつかない「激しい世界平和のための闘い」が姜司教さんのイニシャティブで現実に闘われたのです。



米海軍基地建設反対の運動は、沖縄の米軍基地反対闘争と同質のアメリカの世界戦略との闘いですし、ベトナム村民虐殺はもちろんベトナム戦争に韓国軍が駆り出されての悲惨な結果ですし、「4. 3事件」もアメリカに後押しされた李承晩大統領の指揮した反共産主義の弾圧事件です。しかし、すべてをアメリカの責任にすることはできません。アメリカの戦略に同意した韓国側の責任も大きく問われねばなりませんし、そこには当然日本の存在も無視しがたく影を落としています。今回の旅で印象深かったのは、この日本の存在で、それはゼロ戦が保存展示されていた「ゼロ戦記憶公園」とも言うべきアルドリュウ飛行場跡です。今回の訪問前に朝日新聞に高橋源一郎さんのゼロ戦公園訪問の記事があり、その記事では「ゼロ戦の翼に結び付けられていた短冊の文句を読んで貰い、複雑な思いにさせられた。」とありましたので、どんな文句か現場で読んでみたいと思っていました。七夕の竹に結びつけられているような短冊が沢山たくさんあり、針金で作られているゼロ戦模型の翼が色とりどりの短冊で翼の鉄線が分からないほどに沢山結んであるのです。

姜司教さんに訳してくださいと頼むと「日帝」と日本を恨んでいる戦争中の韓国人の気持ちが噴出している短冊に目を通して姜司教さんは、びっくりしたように、「これは“祝 安倍死亡 祈願”ですよ。」と見せてくれました。ゆっくり見れば、ハングルも読めるので、じっとみると確かに“チュック、 アベ サマン キガン”と書いてあります。ここまで激しいかと韓国の人々の怒りの深さを目の前のゼロ戦模型を見ながら、心に受け止めました。他のは「戦争はぜったい嫌です。」とか「歴史を忘れる民は滅びる。」などなど日本批判は強烈なものがあります。現地には英文の説明看板もあり「ここは、日本軍が戦争末期にゼロ戦格納庫を20作り、いまでもこの飛行場には

12の格納庫が残されています。これらのゼロ戦は戦争末期にアメリカ軍を迎え撃つために配備されていました。」とありました。

当日は天候が悪く、見ることは出来ませんでした。この飛行場跡の近くには、地下壕が1.2kmに渡り掘られていて、中はジープで行き来できるようになっていて、戦争末期には、この地下壕に大本営を持って来る計画もあったそうです。「ほんと?!大本営は長野県の松代でしょ」と思ったのはぼくの無知から来たことで、翌日に見た「4.3事件記念館」の展示によれば、戦争末期には沖縄を落とした米軍は「鹿児島上陸の作戦」と「済州島攻略後、佐世保攻略」の2作戦があったそうです。なぜなら、日本軍は済州島を最後の抵抗基地として7万人の兵員を済州島に集めていたからです。考えてみれば、ぼくらは今は済州島や朝鮮半島を日本の領土と考えていませんが、1944年や1945年の時点では米軍を迎え撃つ作戦は、当然済州島も朝鮮半島も含めて作戦を作ったのでした。

こうした軍事的背景の下に、1947年の「4・3事件」は起きたのでした。「4.3事件記念館」(正式には「済州4・3平和記念館」)の展示は、ですからチャーチル・ルーズベルト・スターリンの3首脳のヤルタ会談の写真から始まります。そして続いて、日本軍の武装解除が展示され、日本軍が居なくなった後は、朝鮮半島全土約90の地方自治体の内50自治体で自主的に組織された建国委員会の地図が展示されています。日本により最期を迎えた李王朝は復活させずに3・1運動で示されたような統一朝鮮共和国が志向されますが、ヤルタ会談ではアメリカとソ連は統一を合意できず、南=李承晩・北=金日成と事態は分裂して進み、南単独選挙反対の済州島建国委員会は全面ストライキに突入します。アメリカの単独選挙強行により成立した李承晩政権は、済州島は共産党支配下に落ちたとみて、アメリカ支援の下「赤狩り」を開始し、これが1950年に始まった朝鮮戦争の混乱の中での済州島200村全体での大量虐殺に至るのです。

「百祖一孫」(百祖一孫とは村の住民百家族が同じ日に祖先をなくしたことにより、皆同じ日に命日を迎え、祭祀を行う同じ親族の仲であることを意味します。)遺族会が保存した虐殺現場が済州島の南部にありました。プサンからソウルまで、吹き荒れた朝鮮戦争の混乱で、全国に無数にあった虐殺現場はほとんど残されていないのですが、済州島の僻村では、残っていました。百祖とは百の家族で、虐殺の結果、孫一人しか生存しなかった、という悲惨を遺族が残している村です。132人が殺され、内訳が農民77名・教員14名・学生6名とかあり、年令は1~20才34名・21~25才42名などと分析されていました。慰霊碑が立っていましたが、其のわきには旧慰霊碑が全斗煥軍事政権に打ち壊された残骸が保存されていました。このような大虐殺は長い間伏せられ、公にされることはありませんでした。李承晩政権時代はもちろん続いた軍事政権時代には、民衆の闘い・嘆きは公表が許されませんでした。広島・

長崎の原爆の悲惨が長い間、「人類への犯罪として断罪されるのを恐れたアメリカ」によって公表が許されなかったように。

姜禹一司教さんは、ソウルでの長い司教としての仕事を終えられ、原発批判をまとめた韓国司教教書「核技術と教会の教え—核発電についての韓国カトリック教会の省察—」を韓国司教協議会会長として出された後、引退に近い感じで済州島の司教になられたのですが、どっこい神様は彼の見識と人格の力を「アメリカ海軍基地建設反対運動」で活用されました。運動は基地阻止には成功しませんでしたでしたが全国的支援の裏りとしての「フランススコ平和センター」が建てられ、今も世界・東アジアの平和を追求し続けるモーターとして活動が続いています。驚くべきことは、姜司教さんの辛抱強さです。この基地反対活動を通じて、「4・3事件」の当事者の声に接して、その声をまず、カトリック教会の司教さんたちの間に届け、カトリック教会を通じて、韓国全土に届ける運動に育て上げて来られた姜司教さん、その辛抱強さと視野の広さです。今はアメリカでも徐々に声は広がり、日本でも「4・3事件記念碑」が大阪の天王寺の総持寺に建てられ、この4月19日には姜司教さんの講話も予定されていました（コロナのため秋に延期）。

姜司教さんはベトナムでの韓国軍の虐殺事件や慰安婦問題を戦争のもたらす最大の人権侵害の問題として扱い、国家の行動への批判・監視の必要性を身に染みて感じておられるようです。海軍基地の問題も4・3事件も人類の汚点として「忘れてはいけない」だけではなく「そこから未来への教訓を学び取り続けねばならない。」「国家という怪物を人として飼いならし、人間的な組織に変える力を身につけましょう！」ということだと理解しました。怪物と言え、新型コロナウイルスについても、ウイルス撲滅を目指すのではなく、ウイルスとの共存をめざし、人類が熱帯雨林の奥まで手を伸ばしたり、家畜の大量飼育を都市内部で行ったり、自然への介入度合いの強い共同体になったことの代償として、ウイルスは必ずついて回ることを受け入れる必要がありますから、撲滅ではなく、免疫力を強める方向で、いわば“飼いならし”作戦を練らなければなりません。和歌山で言えば、夜回り会の行う食事会についても、この観点をとれば、人が集まることを避けるだけではなく、栄養を野宿の人につけてもらうために、来てもらって栄養ある弁当を一人一人に渡す、という食事会の心を生かした対応策をとりました。ウイルスは大部分の人にうつり、住処が安定すると人間という宿主を殺すのではなく共存することを選びますから、毒性も穏やかに変わります。国家という毒性、相手を抹殺したいという殺意を矯めて、共存の道を古代から選んできた人類の知恵をウイルスに対しても国家に対しても生かすべきでしょう。国家の行動様式を理解し、矯めていくためには、歴史を学ばねばなりません。神でさえも、人間がどういう存在かを知るために、人と同じになって赤ん坊から学習して下さったのですから。おめでとう、とはとても言えない復活祭を経験した僕らの復活理解がここに 있습니다。死を滅ぼすのではなく、死のトゲを抜き去って下さったと。

講演会 ハンセン病問題を終わりにできるか!! — 家族訴訟の団長として —

2月15日に、サクラファミリア（大阪梅田教会）の大聖堂を会場に、ハンセン病家族訴訟の原告団団長の林 力（はやし ちから）さんの講演会が開かれました。主催はカトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター（部活センター）、共催は シナピス（大阪教区社会 活動センター）で、社会司教委員会が協賛しました。司会を部活センター長の奥村神父（京都教区司祭）が行い、社会司教委員会委員長の浜口末男司教（大分教区）が挨拶をしました。

今回、カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターと、日本カトリック部落差別人権委員会が、それぞれのニューズレターに同じ講演会の要約を掲載します。



福岡からまいりました林^{はやしちから}力と申します。今日はハンセン病にかかった父のことと私のことを少しお話したいと思います。

ハンセン病という病気

はじめに、すでにご存じのことかもしれませんが、ハンセン病という病気について少し整理したいと思います。昔は「らい」（癩）と呼ばれていました。「らい菌」を発見した人がノルウェーのアルマウエル・ハンセンという人だったので、特に戦後になって「ハンセン病」と言い方をするようになりました。このハンセン病は非常に伝染しにくいと言われています。伝染病というより感染症というのでしょうか。全国に13ヶ所ある国立のハンセン病療養所で働いている人で、ハンセン病にかかったという人は明治以来居ないと言われています。

ただ、発病すると人の目につきやすく、顔とか手とか脚などがゆがみますので、非常に恐れられてきました。仏教の影響もあって、「前世の因縁」、人間に生まれる前の命が何か悪いことをしたからこういう病気になったのだなどと、久しく言われていたわけです。

隔離の始まり

我が国では明治になっても、ハンセン病の人たちは私たちと一緒に生活してしまし

た。差別され嫌われながらも社会の中で暮らしていたわけです。ところが、明治 40 (1907) 年に「癩^{らい}予防ニ関スル件」(明治四十年法律第十一号) という、日本で最初のハンセン病についての法律ができます。その内容は「強制隔離」でした。つまり本人の同意や家族の賛同などがなくとも、国家権力が強引に拉致して癩療養所というところに閉じ込めてしまうということでした。

なぜ明治 40 年にこの法律が作られたかといいますと、日本は明治 27 年 28 年の日清戦争で当時の最強国と目されていた清国と戦争をして、世界中が驚いたのですが、勝っています。さらに 10 年後には、これもまた世界の大国であったロシアとも戦って、不思議にも勝ちます。そして、世界の五大強国の一つとなったのです。五大強国ともなれば、世界中からいろいろな国の人が日本に来るようになります。日本に来たら、巷に風貌のゆがんだ人がウロウロとしていて目につく。これは国辱、国として恥ずかしい。恥ずかしいから隠す。療養所に囲い込む。囲い込んでも何も治療はされないのです。

これが日本のハンセン病政策の始まりです。国家の体面上、療養所に引きずり込んだということです。それを先ず頭に入れておいていただきたいと思います。国恥論といます。



父の入所

私が父の異変に気づいたのは、まだ学校に上がる前のことでした。父は母親の郷里の長崎県の大村で、かなり手広く商売をしていましたが、昭和 2 年 (1927 年) の金融恐慌による大不景気のあおりを受けて、倒産しました。そして博多へ逃げて、小さな四軒長屋の一角に暮らしていました。父は当時としては珍しい 5 年制の旧制中学を出ていました。それが災いしたのか、なかなか仕事

がなく、例えばアイスクリームを作って売るとか、縁日でものを売るとか、いろいろな行商を転々としていました。

ある時、雨が降っていて、行商に出られない父が家に居ました。私は父の膝の上に座っていて、ずっと気になっていた手のゆがみを直してやろうと、「父ちゃん、手を直してやろう」とその手に触ったところ、普段はとても温厚だった父が「さわるな！」と烈火のように怒って、私は膝から落されたのです。それがまず記憶にあるわけです。

そして、忘れもしません。小学 6 年生の夏休みが終わる頃、父が家から出ていくということになりました。どこに行くのかは子どもだからわからないのですけれども、別れが悲しくてきつと泣くだろう。男の子は泣いてはならないという時代でしたので、私はトイレに隠れていました。そうしたら、「力！ 行くぞ、行くぞ。見送らんのか」という声がして、その声に誘われて玄関に出ましたら、父の姿はもう野辺のほうへ遠ざかりつつありました。「とうちゃあん」の呼び声にも、父は振り返りませんでしたが恐らく泣いていたのでしょう。中折れ帽子をかぶって、小さな風呂敷包みをゆがんだ

手に引っかけるようにして、右足を引きずるようにしていました。

この右足は、長靴を履いて庭を歩いているときに釘を踏んで、その傷がどうにも治らなくてだんだんと大きくなったものです。療養所に入所してから切断されてしまいました。病勢を止めるという意味だったのでしょうか、当時の療養所では足でも手でも、どんどんぶった切っていました。戦後になって私が訪問した時には、手や足を失った人が所内にたくさんおられました。

数日して父から手紙が来て、母が読んでくれました。

「博多から鹿児島まで夜行列車 — 後に時刻表を調べると 0 時 30 分博多発の下り列車がありました — に乗り、鹿児島に朝ついて、桜島を左に見て錦江湾を渡る船に乗った。その船の中で『らい患者』であることが発見されて大騒ぎになり、自分は機関室の中にとじこめられ、船中が大消毒になった。船が古江の港について、お客さんが全部降りてしまった後に機関室から引きずり出された。表に出てみたら「国立療養所星塚敬愛園」と書かれたトラックが待っていて、その荷台にひきずり上げられた。東の方に 30、40 分走ったところに、突然広大な敷地の建物が表れて、その中に收容された。博多にいるときには風貌のゆがみに気兼ねをしていたけれど、ここに来たら同病の仲間ばかりが沢山いて、気兼ねなく暮らせる。時々お前たちがなつかしくなると、ここは星塚という地名のように星のきれいなところだから、小高い場所に登って、北の方の空を眺め星を見てお前たちのことを思い出している」このような手紙でした。

その手紙と前後して、何の予告もなく白い消毒車がやってきました。白装束に長靴だけが黒い屈強の男たちが 5、6 人、ものも言わずに私の家にドカドカと入ってきました。そして、庭木から天井、床下、井戸の中まで、白い粉の消毒薬を振りかけ無言のまま引き上げました。8 月の終わりですから、近所の人たちは皆、風通しのいいところで談笑していたのですが、みな驚き慌てて家に入って、戸を閉めて恐怖の目で私の家を見つめ指さして見ていました。新学期になり学校に行くと、私は「くされの子、くされの子」の大合唱にさらされることになりました。

両親には子どもが 4 人いたのですが、当時は、衛生も医療も貧乏な家には遠く、幼い子がどんどん死んでいまして、私の兄妹たちも一晩にして死んでいって、7 か月で生まれた早生児の私だけが、生き残った訳です。そのこともあってでしょう、東京にいる父の兄を頼るという形で、一か月足らずして東京へ出ました。考えてみると、これがハンセン病の父からの逃亡の始まりでした。それから、私は貧乏な中で旧制中学に入り、戦時体制になって、20 歳になり否応なく徴兵され、兵隊になって 1 年余りで敗戦になり、博多に帰ってくることになります。兵営の中で父のことがとりざたされることはありませんでした。

父との再会

私は、代用教員でも助教でもよいので学校の先生になりたかったのですが、当時は

占領軍総司令官マッカーサー元帥の命令で、軍隊から帰った復員軍人は教職に就くことができませんでした。それで、県立の「少年教護院」に勤めました。

そこでは罪を犯す恐れのある虞犯少年、すでに罪を犯した少年、あるいは戦争のために家を失った少年、両親がどこに行ったか分からない少年、そういう少年たちを集めて寮に入れていました。義務教育を教える教室があり、私はその子たちに学力を保証するという仕事をしました。

戦争が終わった翌年の冬のある日。私は、暖房もなかったので日当たりのいい廊下に、一人ずつ少年を呼んで「身上調査」をしていました。そうしたら、そのうちの一人の少年が私に食ってかかりました。「あんたどうして俺たちの親のことなんかをいろいろと聞くト！あんたのお父ちゃんやお母ちゃんはどうしとるとね。アンタこそ言いなさい！」

そう言われて見ると、母親とはずっと一緒。でも父親は小学校6年生の時に立出してから、長いこと会っていないじゃないか。「あんたの父ちゃんはどうしとると！」と少年から言われて、そうだ小学校6年生の時に別れて、自分は兵役にも行って、今21才になってここに居るのだけれど、父ちゃんはどうしているのだろう、という思いが潮のように湧き上がってきました。

ところが、今では想像もできませんが、当時の国鉄の切符は庶民にはまったく手に入りませんでした。程度のいい列車はすべて占領軍が接收してしまい、焼けただれて窓が破れているような列車しか残っておらず、その切符も容易に手に入らない。ところが、米軍の通訳をしている人に頼んで「にせ」の通訳の証明書を作ってもらい、それを窓口に出したら、もうすぐに切符が手に入りました。

それを持って博多から鹿児島に出て、船で渡って、それからまたローカル列車に乗って、さらに一時間ほど歩いて「国立療養所 星塚敬愛園」に参りました。今のように携帯やメールもない時代で、まったく連絡なしで訪ねました。

広々とした野辺の真ん中に、広大な敷地が見えました。正面玄関に入って、事務所らしいところに行きましたら、「ああ面会！面会なら面会所の事務室に行きなさい！」当時の患者の置かれた状況を代弁しているのでしょうか。つっけんどんも甚だしい対応でした。面会所の事務局で、「馬場広蔵」と父親の名前を言いましたら、「ああ、山中捨五郎のことやね」と言われました。一園に入った者は、全員世の中にいたときの名前を捨やまなかすてごろうてて「園名」を使っているのですが、父親は自分の気持ちのままに「山中捨五郎」という園名を名乗っていたわけです。後に「山中五郎」と変えます。

「面会所で待ちなさい」といわれて待っていました。面会所というのは狭い部屋で、真ん中に大きなテーブルがあって、外部から入った人間はテーブルを越えて中に入ることはできない、園の中の人たちはそのテーブルを境にして社会に出ることはできないという仕組みでした。

その面会所に、息せき切って汗をぼろぼろと流した父親が、ブリキの脚、松か柘植つげを

足の形をしたものにブリキの筒をつけて、切断された脚にガボツとはめた義足、を引きずってやってきて、目の前に座りました。そして、ボロボロボロボロと涙をこぼし、声を挙げて泣きました。小学校 6 年生の時に別れた息子が二十歳を超え目の前にあらわれたのです。「おおきゅうなったなあ」、「すまんかったねえ。俺は何にもお前にすることができなくて」と、ただ泣くばかりでした。

星塚寺院の建立と父の死

父は昭和 13 年（1938 年）9 月にそこに入所するとともに、園長に指名されて、当時 1,300 人ほど患者がいた星塚敬愛園で「患者総代」というものになっていました。多分それは、このハンセン病という病気は、その根底には先ず貧困という問題が横たわっている病気ですので、結果的に旧制中学を出ている人が園内では非常に少なかったこともあってのことだったのでしょう。

やがて戦争が終わりました。その時には社会全体がまさに下克上でした。天皇すらなくなるかという時代ですから、世の中には労働組合とか自治会とかが急に結成されて、今までの恨みつらみを晴らすかのような風潮がありました。いままで上におったものを引きずりおろして、徹底的に攻撃するという風潮が社会全体にありました。その中で療養所も、今まで非常に権力的で威張っていた医者とか事務官僚というものにとって代わって、患者自治会というものができました。父親はその患者自治会の議会の議長に任命されていた訳です。

ところが父親には、戦争に敗けてアメリカが占領して天皇がなくなるというような大きな動きは当然だとしても、いままで平身低頭していた医者や事務官僚に対して、患者たちが急に威丈高になって攻撃的になったり、命令したりするような園内の状況に、どうも納得できないものがありました。そこで「寺を作ろう」と思い立ちます。私にも「志あって園内に浄土真宗の寺院を建立したい」と手紙が来ます。

しかし、戦後になって隔絶ということはなくなったとはいえ、今のようにファックスやメールなどのない時代に、行動の自由でない者がどうやって浄財を集めるのか、と私は首をかしげていたのです。ところが、父親は、歪んで不自由な手にペンを指して、インク壺につけて、「寺を作りたいので浄財を」、という手紙をただただひたすらに書き続ける訳です。

当時のことを知る上野政行さんという方にうかがったところ、とにかく昼も夜も手紙を書いていたということです。そして志ある方の大きな寄付もありまして、とうとうハンセン病療養所の中に浄土真宗の寺院を作ります。これがいまも残る、入所者の皆さんが守ってくださっている「星塚寺院」です。そこで父親は朝 4 時に起きて、一人で灯明を上げて南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏に明け暮れていました。

訪ねて行った私が、飛んでいる蚊とか蠅を落とそうとすると、「力！生き物を殺すな！」というところまで徹底しておりました。寺を作ってそう何年もたたないうちに体調が悪くなり、病室兼居室にしていたその寺の控えの間で、とうとう息絶えていき

ました。本願寺からは「^{しよくじょうねん}釈常念」という、念仏に明け暮れた人であった父に、まさにそのまま当てはまる法名をいただきました。

父の願い

お寺を造ることと同時に、もう一つの父の痛切な願いは、「父のことをお前は世に知られるな」ということでした。「ハンセン病の患者が身内にいることを世の中に知られて、幸せになった人間は一人もいない。父はお前に何もしてやれなかった。ただ一つの願いは、どうぞ父のことを世に知られないようにしてくれ」それを会うたびに口にしていました。

実は、私はすでにある経験をしていました。初めて勤務した小学校の教員の仲間を好きになったのです。当時の恋愛というのは、いまと違って何ということもなかったのですが、3 か月くらいすると刑事が家に来て父のことを根掘り葉掘り聞きだして帰ったそうです。その翌日から、廊下で会っても彼女は顔を伏せて目も合わせない。帰りがけに、一緒に帰ろうとしてもいつの間にか裏門から逃げて帰ってしまうようになる。四月の新学期になったら、校長も知らないうちに役所の力を借りて、よその学校に転勤してしまった。要するに逃げてしまった訳です。もちろん父のことで失恋したなどということを父に言うはずありませんが、父に言われるまでもなく私は父のことを必死に隠し続けていました。

福岡市長選挙差別事件

そういう私に非常に大きな運命的ともいえる転機が訪れます。1956年の「福岡市長選挙差別事件」です。戦後すぐには、いろいろな地方自治体で、時代の勢いに乗っていわゆる革新系の人が首長におさまっていました。1956年頃になると、世の中がようやく一息ついて何とか飯も食えるという時代になっていました。その年に福岡市長選挙が行われ、そこで大変な差別事件が起こるわけです。市会議長をしていた^{たかおかみのる}高丘稔が革新側の候補として、議長をやめて市長選に打って出る。保守の側がこの人を止めようとして、九州で一番大きな九州電力の社長をしていた^{おおくら しげとし}奥村茂敏という人を擁立して、保革の大接戦が繰り広げられました。予断を許さないまま最終盤にきたときに、どこから出たのか誰かが仕掛けたのか、「市会議長であった革新系の候補者はいわゆる同和地区の出身者である。もしその人が市長になったら福岡市民は全国に恥をかくことになる」という流言やビラが大量にばらまかれたのです。多分それが影響したのでしよう、高丘議長は大惨敗をしました。

私はこの事件を通じて、九州の福岡で初めて「同和教育運動」、部落差別をなくしていこうという、いまだあれば人権教育運動を始めるわけです。だが同和教育を始めたといっても、先達があるわけでも、市や県に指導主事があるわけでも、参考書や指導書があるわけでもない時代でしたから、いわゆる同和地区に出かけていく以外に、できることはありませんでした。

夕日が美しい

今では想像もできませんが、当時の同和地区の人たち、特に女性たちには、文字を持たない人、いうならば教育権を奪われていた人がたくさんおられたのです。ならば、というわけで、学校が終わったらうどんでもすすってから、自転車でムラ（同和地区）に行き、お母さんたちの手をとって文字を教え始めました。それが「識字学校」というものです。

遠い昔のことですが、当時は、生き生きしていました。労働で荒れたお母さんたちの手を握って、「いろはの“い”」、「差別の“さ”」、「解放の“か”」、自分の名前、住所、そういうものを教えていくわけです。

終わって帰るときには、自転車の後ろにとれたての野菜などが結び付けられていたりする。また、差別の中を生き、毎日汗を流している婦人たちが、今度は学習から解放されて、キャッキョと大笑いをする。いわゆるエロ話などもするのですが、カラッとしていて、それがちっとも汚くない。そんな学びもありました。

福岡県の教育長のところに、そういうお母さんたちと一緒にいったことがあります。場所は福岡市民会館です。日曜日にも関わらず教育長は話を聞きに来てくれました。その時にあるお母さんがこう話しました。

「教育長さあん、ウチねえ、字い習うたらね、夕日が美しゅう見えたんよ」

どういうことでしょうか？差別の中で学校に行くこともできなくて、文字も習えなかった。そういう中であって、これまでに夕日をどれだけの回数見たかもわからないけれど、「夕日が美しい」とは思わなかった。学校の先生たちが夜やってきて、手をとって文字を教えてくれて、ようやく「いろはにほへと」が書けるようになって、今までなかった習慣として、ポケットの中に小さな手帳と鉛筆を入れるようになっていた。

「夕日を見たら『美しい』と思って、『ゆ う ひ が う つ く し い』と書いたんよ、教育長さあん」

文字を持たないということは、美しいものを見ても、美しいと受け取ることができない。差別というと、なにか結婚や就職だけのことと考えていたけれど、美しいものを見て美しいと感ずることも、表現することもできない。そういう感性を奪われていたとすれば、それこそ大変な差別じゃないか。差別とはそういうものだったのか、そう教えられました。あのお母さんのことは今でもよく覚えています。

「水平社宣言」との出会い

もう一つの私自身の学びは、父を話す力を与えられたことです。私は父のことをずっと隠してきました。父を訪ねて行くために博多駅から列車に乗るのに人目が一番心配でした。人から見られないように夜行列車で行って夜行列車で帰っていました。ところが、同和地区の人たちの先達は、1922（大正 11）年 8 月 3 日に、いまでは想像もできない差別と屈辱の中であって、京都の岡崎公会堂というところに集まって、差別への戦いを宣言していました。いわゆる「水平社宣言」（注 1）です。その中に「エタ

である事を誇り得る時が来た」とあります。蔑まれて、その屈辱に逃げまどっていた時と、「何かおかしいかね、同じ人間じゃないかね」と胸を張った時とでは、同じ「エタ」であっても違うのです。その一文に接した時、私の中に、「お前はなぜ父を隠す。父は一つの感染症にかかっただけではないか」という当然の自問自答が起きました。

恥でないものを恥とするとき本当の恥となる

『解放を問われ続けて』という本を1974年に出しました。実はここで父がハンセン病患者であったという事を書いたわけです。父は「隠せ」と言っていました、私は父の事を書いてしまいました。「水平社宣言」に影響を受けて、父がハンセン病患者であったという事を書く力を与えられたわけです。

よく「その時お父さんは」という質問をされますが、父はすでに亡くなっていました。いかに水平社宣言に学んだといえども、「俺のただ一つの願いは、この父を生涯隠し続けることだ」と言っている父がいるのに、それを語ることはとてもできませんでした。

「父はすでにこの世にいない。隠そうと思えばそのまま済まされるのだが、私は語ることに新しい意味を見つけようと思う。父は癩病^{らいびょう}であった。不治の病、業病と言われた癩。本当は誠に微弱な伝染力しか持たぬ感染症であることが、決定的に立証されているにもかかわらず、予断と偏見は根深い。

先年も福岡県の自治体の職員が差別事件を引き起こした。その中で、同和地区の人は加藤清正が連れてきた朝鮮人の捕虜で、彼らが癩病と梅毒を持ってきたと思っていたと、とんでもない述懐をしている。忌まわしいものとして、部落とハンセン病を重ねているのだ。

私は、この父を持たなかつたら、部落問題への目覚めはなかつたと思う。ふるさとを語ることを獣のように恐れた部落の親たちが、いま胸を張って故郷を名乗りうる世の中をつくらうとしている。そして、識字学校に学んだ母親が胸をときめかせ、唇を震わせながら、我が子に部落であることを語りかけている。

私もただ一人の娘に祖父の受けてきた癩者ゆえの差別を語りかけたいと思う。私が父を明らかにすることで、誰かが私や私の娘の皮膚の色を垣間見ようとするかもしれぬ。私はここで部落と癩という二つの成り立ちの違う差別を論理的に解明しようというのではない。ただ恥部を明らかにすることによって、より強い人間となり、恥部を恥部でないものにしようとする。娘は明るく笑い飛ばすかもしれない。だが私はひっかかって生きてきた。」(『解放を問われ続けて』(林力著、1974年、明治図書出版)より)

遠い昔のことですけども、そこで、「恥部でないものを恥部とするとき、それは本当の恥部となる」と書いています。

ただ、今になってこれは少し傲慢ではないかという気がするのです。どういうこと

かと言いますと、私はたしかに父親がハンセン病患者であったということを世の中に宣言して生きてきました。宣言して、何もそれで不利益を受けた覚えはございません。この頃少し気になってきたのは、私は 21 歳から 56 歳まで公務員。公立の小学校、高等学校の教員でした。一年おいて 57 歳から 77 歳までの 20 年間は私立大学の教員でした。いうならば非常に身分の安定したところにいたのです。何を言おうとしているかという、私が中小企業の勤め人であったり、街で食料品店を経営していたりしたとします。そういう立場であったとすると、私は「父がハンセン病患者」であったという事は、とても言えないと思います。それは立ちどころに売り上げに影響してきて、生活が成り立たなくなるからです。

俺は誰もやらないようならい患者の息子宣言をしたというけれど、考えてみたら身分と生活を保証された立場にあったからこそできたので、小さな企業に勤めていたり店をやっていたら、それはできないのではないのでしょうか。私はいまも隠し続けているに違いないと思います。

ハンセン病を国民に教えない国

そこで思うのは教育の問題です。明治 40 年の「癩予防ニ関スル件」というのは、実は患者を強制的に療養所という一定の空間に収容するという中身であったと言いました。そういう大変なことをやっていて、しかも戦後の民主主義、人権の世の中になってもそのことが続いていた。

ハンセン病について、この国が何をしてきたかということについて非常に気になる事は、なぜこの国の教育は国民に語らないのでしょうか。そこだけは非常に隠微なものとしておいている。強引に拉致して隔離した。それは過ちであったということ、なぜ国は教育の中で国民にちゃんと説明をし、謝罪をしないのでしょうか。皆さんも皆さんのお子さんたちも義務教育、高等教育を通じてハンセン病については何も学ばないできている。本当におかしな国です。

最近、父親が収容されていた星塚敬愛園に行った際に、町からかなり離れたところなので、タクシーに乗ったのですが、療養所の近くまで来たら運転手が、「お客さん、ここは療養所ですね。どういう病気の人が入っておられるのですか」と聞くのです。鹿屋市も鹿児島県もハンセン病について、まともに教育していない。当然、国がどういう間違いをしたのか、なぜそんな間違いをしたのかも、何も教えないであやふやにしています。

父ありてこそその人生

私はあらためて、父ありてこそその人生であったと思います。ハンセン病の父親を持たなかったら、今よりもっとくだらない人生だったと思います。

勸善懲惡を振りかざして、特にその親たちがどういう生産と労働に従事して、どういう教育の総和の中に生きていて、そういう人からこの子は育てられている。その意味で皆一人ひとりの子どもが違っているという認識のないまま子どもの前に立ってい

る、恐ろしい教師になっていただろうと思います。

そういう意味で、私はあらためて父ありてこそその人生であったと思います。

長いこと父を恨みました。父を隠しました。父から手紙が来たら、^{いんきん}黴菌がついているのではないかと、読みもせずにとくさん捨ててしまいました。大変な親不孝をしたと思いますが、そのおかげで少しばかり人権というものを考える力を与えられて、先ほど申しました 1956 年の福岡市長選挙差別事件をつうじて、福岡で初めて人権同和教育運動を提起することができたのも、ハンセン病の父を持ったからでした。

私の人生もあと幾何^{いくばく}となりましたけれど、本当に「父ありてこそ」の有難い人生であったと、つくづく思っているところです。

(注 1) 「水平社宣言」：全国水平社創立宣言。1922 年（大正 11 年）3 月 3 日、京都市・岡崎公会堂での全国水平社創立大会で採択された〈全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ〉に始まり〈人の世に熱あれ、人間に光あれ〉で結ばれる、日本の最初の人権宣言。（『部落問題・人権事典 新訂版』より抜粋）

「沖縄タウン」学習会へのお誘い

沖縄へ行かずに、沖縄を知ることのできるのが「沖縄タウン」で、大阪市の大正区にあります。大正区はリバティ大阪のある西成区の隣で、本土＝ヤマトでは、一番沖縄出身者の多い所です。第一次世界大戦後の不況で、砂糖価格が暴落、毒を含むソテツの実や幹を食べて飢えを凌ぐ沖縄の人たちが、生きる術を求めて、阪神の製紙・紡績などの工場に労働者として、働きに来ました。彼らが集住できたのが、大正区のくぼ地＝グブンガアーでした。このくぼ地の沖縄出身者の居住権闘争は、解放同盟の経験を生かして、たたかわれました。ナミお婆の「沖縄人を窪地クブンガアーから追い出す前に、米軍に奪われた沖縄の“我が土地”返せ」との正義を求める叫びの底深さを参加者皆で学びたいと思います。

昨年の学習会「インド・ダリットと日本の部落解放運動」の講師・安田耕一さんに、引き続きリードをお願いしてあります。安田さんの一言「クブンガアーは本土からの沖縄への入り口、クブンガアーの歴史を知らずして沖縄は語れない、という思いが強くなります。沖縄戦の悲惨、米軍基地問題だけで語られる沖縄ですが、それだけではない“歴史の総体”への問いかけが求められています。」

学習会は秋以降に開催予定しています